

婦人集会レポート



生きづらさに寄り添う

「発達障害の子供たちと歩む」講義を終えて
白井恵子



伝道者はありとあらゆる様々な相談を受けるものです。たとえその力が無く、知識が無く、無力であったとしてもそのすべてに責任を持ってお返ししていく使命があります。そこから、キリストの確かな福音を語る召しをいただいているからです。

足りないながらも、ご父兄から依頼されてから、試行錯誤しながら、発達障害のハンディを持つ、傷ついたり子供たちの学習支援を始めてから、12年ほど経ちました。今回の開拓伝道者セミナーでの講義は、そのことについて①発達障害とは何か、基本的な知識の学び。②基本的な配慮と関わり方。③聖書的なアプローチ、という項目でお話しさせていただきました。それは最終的に、教会という場所が「休み場」となり「自分の居場所」となり、キリストの救いと平安の中で「憩う場」であってほしいと願います。私たち婦人伝道者の役割は賜物に応じて違いますが、魂に真摯に向かい、与えられたタラントを土に埋めることなく主のためにお捧げしていくことに他なりません。

キリストはこう言われるのです。「あなた方は、わたしが空腹であったとき、わたしに食べ物を与え、わたしが渇いていたときわたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしを見舞い、わたしが牢にいたとき、わたしをたずねてくれたからです。」主をお迎えするようにすべての魂に関わっていきたいものです。



婦人集会で三澤和子先生がお語りくださった内容の要約はかいたく誌67号に掲載されています。かいたく誌のバックナンバーはJBBF国内宣教委員会のホームページからご覧になれます。
<http://jbbfhomemission.jp.org/journal/kaitaku67.pdf>

女性分科会

様々なテーマをとりあげ、お互いの経験や悩みを分かち合う、慰めと励ましの満ちた集いへと導かれました。以下にその一部を記載します。

〈家庭・子育てに関して〉

- 自分子どもたちを一番愛せるのは自分しかない。子どもたちは私の弟子。働きが忙しくても、子どもたちとともにデポーションをしたり、悩みを聞いたりすることを大事にしてきた。
- 自己受容が大切。神様に愛されていることがわかれば、子どもや兄弟を愛することができる。
- ご主人と祈り、役割分担をしていくことが大切。家族を大切にすることは、社会に対しても大きな証になる。子育てをしながら奉仕することに難さを感じることもある。会堂が狭いと子どもの泣き声が響いてしまい気になる。教会全体で、幼子の存在の尊さを認識したい。
- 他の牧師家庭と比べてしまいがちだが、そこにとられないようにした。普段は、牧師家庭色はあまり出さず、家庭としてゆったりできる時間を持つようになってきた。

〈失意からの回復〉

- 兄姉が教会から離れてしまうことは何よりも悲しく辛い経験であった。
- 先輩の先生に相談できたことはよかった。また教会の祈りが力となった。長い時間がかかって、なかなか悲しみは癒えないが、召しを捨てないことが大切。

〈Facebookを活用した伝道〉

Facebookも伝道の接点となることもある。教会の働きや女性伝道者としての思いを投稿できる。投稿に対して未信者からの質問が寄せられ、個人伝道にまで導かれることもあり驚いている。昨年、クリスマス集会の案内をFacebookの広告に掲載した。お知らせしたい地域・年齢・性別を指定して広告を出すことができる。現代的なツールとして有効活用できる。

〈仕える心〉

一人一人に与えられた賜物は異なる。「あの人がなりたいなら」と思う必要はない。女性伝道者は人の目を気にしてしまいがち。「ただ主にお仕える」という思いで仕えていくことが大切。



※この文章は、去る1月3日〜4日に開かれた国内宣教カンファレンスの説教を抜粋、修正加筆したものです。

「ヨハネ一六・三三」と励ましたのである。私たちの課題は多い。特に21世紀の世界は思想的にも社会的にも混乱期にあり先端科学の進展は、種々の倫理的問題を提起している。世界をすべの論理的な問題に仕えるしもべとして、しっかりとした神学的見地に立って、「目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになつてい」と言われた世界に、福音の鎌を入れて行こう（ヨハネ四・三五）。



2017年 国内宣教カンファレンス

伝道者の召しを全うするために

船橋聖書バプテスト教会 柏伝道所 三澤隆男

2017年1月3日から4日にかけて、静岡県朝霧野外活動センターで国内宣教カンファレンスが開かれました。今回は「伝道者の召しを全うするために」というテーマのもと、三澤隆男先生が御言葉を取り次いでくださいました。また、女性集会の講師は三澤和子先生と白井恵子先生が引き受けてくださいました。ここに集会で語られたメッセージの要約をご紹介します。



「神の助けを仰ぎつつ奉仕し」
伝道者は神の召しを受けて働く。勝手になるものではない（エペソ四・一二）など。召命の確かさは働きの有無からだけでは判断すべきではない。ビルマ宣教のA・ジャドソンが宣教の実を最初に見ることが許されたのは6年後と聞く。「神の賜物と召命とは変わることはありません」（ロマ一・二九）は大きな励みだ。ただ召しの理由は有能だからではない。モーセは、ミデヤンの野の羊飼いとなつて40年、神からも忘れられたような時に召しを受けた。自信家ペテロも、主

「バウロに倣い」
「昨今、教会は複雑化し、牧師のストレスは増すばかりです。人間関係が築けない、精神的疲労、危機対応の失敗などの理由により、召命感と資質を持ちながら辞任せざるを得ない牧師は少なくありません。ある教団の統計によると、5〜10年目の牧師辞任が多いそうです」とあった（「牧師のSOSと危機対応」1P）。そのような状況下で、伝道者は奉仕している。福音の使者に召されて30余年、使徒パウロは弟子テモテに、「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通し。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです」（Ⅱテモテ四・六、八）と牢獄の中から記している。私たちもパウロと同じ伝道者に召された。主に委任された職務を、最後まで投げ出さず、しかも十分に全うしたいものだ。



己の弱さを知る伝道者は、謙遜と寛容を学ぶ。神は「有るものをない者のようにするため、無に等しいものを選ばれた」（Ⅰコリント一・二八）のだから、信仰者は例外なく「無に等しい者」だ。高ぶりは、己を過信し、神に頼る心を奪う。しかし謙遜は、神の助けの必要を常に教え、隣人に仕えることを促す。だから謙遜は、神と人へと結び付け、関係を豊かにする。謙遜を学ぶことは伝道者には重要なことだ。

「喜びを味わいつつ奉仕する」
伝道者は、徹底したキリストへの献身者である。「わたしのものと来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうち自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができます」（ルカ十四・二六）との主キリストの言葉に従って仕える。

「喜びを味わいつつ奉仕する」
この役目は何と喜ばしいことか。「キリストの愛われらに迫れり」と、Ⅱコリント五・一四、文語訳と、伝道者は十字架の愛に押し出され、愛と正義からの解放が始まって、死と虚無と審判の神の業を知り、慈愛と力に満ちた神とその摂理の業を知り、その喜びに加えて、信仰を告白して教会に加わる兄弟たちの誕生に関わり、御国の民とし、一緒に主に仕えるという恵みを味わえる。確かに世にあっては悩み多く、問題は次々と起こる。でも、私たちの栄光の主は、「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝

「喜びを味わいつつ奉仕する」
開始を告げるのだ。つまり「見よ。神である主は力をもって来られ、その御腕で統べ治める。見よ。その報いは主にもあり、その報酬は主の前にある。主は羊飼いのように、その群れを飼ひ、御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く」（イザヤ四〇・一〇、一一）とあるメシヤ支配の預言が成就したことを伝えることだ。



「喜びを味わいつつ奉仕する」
伝道者は、犠牲を強いられ、苦しむだけではない。彼の役目は「神の国の福音」（マルコ一・一四、マタイ四・二三など）の到来を告げ、神の恵みの支配の